

第151号

平成14年4月

E-mail: © 2002
shimz@mb.infoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集 発行 人

清水 吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

電話 045-933-0379

FAX 045-931-9202



16回め



MENU

- 特製ブレンド 380
- レモンティー 350
- 白替りケーキ 300
- ぶるせす 無料
- アルコールは置いていません

今年桜の開花が早く、小学校の入学式のときには、ほとんど散ってしまっていた。どうやら、地球規模で温度が上がっているのではないと思われる。ヒマラヤの氷河も溶け出していて、融雪水が溜まる湖の深さが、今までは70メートルだったのが、最近100メートルを越えていて、このまま行けば、水が溢れる危険が出てきているという。場所によっては、水が干上がってしまうところや、海の水位が僅か10センチ上がったことで、国土が波に侵食されていく国もある。早く手を打たないと、後が大変になる。

仕事も、適切に見積もった工数で実現しないようでは、結局は地球環境の悪化に手を貸していることになる。生産性が悪いというのは、単に社会に負担をかけるというだけでなく、自分たちの地球を壊していることにも繋がっていることを認識しないといけない。

いつもなら開店の準備を終えて表に看板を出すと直ぐに客が入って来るのに、今日は珍しく、まだ誰も来ない。時々あるが、昔、コンサルタントをやっていたとき、1日経っても仕事の関係のメールが1通も来ないときがあって、みんなどうしているんだろうと不安になったことを思い出す。時間を持って余すかのように、新聞に眼を通しながら、つらつら地球に易しい仕事の仕方をしていないと、と考えていたとき、ようやく2人の客がドアの向こうに見えた。

「いらっしゃい」
この2人は、会社に行く前に、ときどき立ち寄る客である。
「今日は、余裕の時間ですね」と声を掛ける。
2人は、軽くうなずいてカウンターに席を取った。
「今日は朝食を食べてこなかったので、トースト何か焼けますか？」
「いいですよ」
「じゃ、僕も」と連れの人も追加した。何だか、この2人、疲れているようだ。トーストの準備をしながら、
「少しお疲れですね」と誘ってみた。
「そうなんです。今日も朝起きれなくて、朝食抜きで来ちゃった」
「仕事が予定通りに行かないのかな？」
「まあ、最初から予定通りに行くとは思っていないけど。毎日これじゃ、やっぱりくたびれてしまう」
「な～んだ、予定通りに行くことを想定していないの？」
「いや、そんなわけではないのですが・・・」
「でも、そうなんだね」というと、ぼつと悪そうな顔をしている。

「どうして、予定通りに行かないのか分かっていないのかな？」
「折角見積もっても、あとで仕様変更が一杯来

るし、見積もったようには行かないよ」
「へ～、見積りの精度を検証したことはあるかい？」
「見積りの精度って？」
「行きなり工数を見積もっていないかい？」
という質問に対して、こちらの意図を計りかねている。
「工数の前にそのプロセスで生み出す成果物のサイズを見積もったかね？」
「いえ、それは・・・」と口ごもってしまった。
「ということは、そこで見積もった工数の根拠は、一体何だね？」
という、また黙ってしまった。
「もともと、殆ど裏付けのない見積りだから、合うはずはないよね」
という、コーヒーとトーストをセットにして、二人の前に差し出した。
トーストの香ばしい香りと、コーヒーのほろ苦い香りが何とも言えない。
二人は、トーストを手にとって、バターやジャムを塗って食べ始めた。
サイズを見積もらないで工数を見積もるというのは、昔から変わっていないようだ。ソフトウェアの現場では、一向にこの種の学習が進んでいないのか。

「ところでマスター、『XP』って知ってる？」
と年配の方が、話題を変えてきた。
「皆さんの会話の中に出てくるので、ちょっと気になって読んでみたけど、大胆な提案だね」
「社内でも話題になっていて、どう扱えばいいか分からなくて。本当に、自分たちでやれるのだろうか」
そこでもう一人の若い人が挟んできた。
「あれって、仕様書や設計書を書かないで、ソースに取りかかって良いと書いてあるので、みんな惹かれる所があるのです。だって、文書を書いている時間がないし。書いても中途半端だし。それを書かなくてもよいとなると、何だか、ここに自分たちの問題を解決してくれる方法があるのではないかなと思えてくるのです」
「うまくいっていない人が読むと、みんな惹かれるだろうね。でも、もともとあなた達は仕様書や設計書といえるものを書いていないのではないの？」
「いえ、仕様書は書いていますし、設計書も書くことなのですが、時間内に書ききれないのです」
「つまり、もともとそのような文書を書いている時間がないような工数しか与えられていない、というわけだね」
「そうす」と、私の隣に簡単にはまってしまった。彼らは、まだ畏に落ちたことに気付いていない。それよりも、味方だと思っている。

「あとになって仕様が変更されると

いうことは、最初に仕様を把握していないということだろう。その証拠に、実装段階に入って、あなた達が客先に仕様変更の機会を持ちかけているだろう？」
「そんなことはないです」
「適切な仕様のレベルに表現できる領域に達した人の目には、仕様の変更の大部分は、設計者が呼び込んでるように見えるものだよ。もっとも、仕様変更も数%以内に納まるがね」
「そうでない人には？」と年配の方が聞いてきた。

「客先からの変更の多くは仕様のレベルでくるので、仕様のレベルで表現できない人には、それがどこに影響するのかを判断することが難しく、どうしても、顧客が悪いと映る」という説明を聞いて、若い人の方が納得顔をしている。どうやら頭が柔らかいようだ。

「XPといっても、最初にテスト仕様を書くことになっていないんじゃないの？」
「そうですが、要求仕様と違うので」
「ほ～、要求仕様がイメージ出来なくても、テスト仕様なら書けるのかな？ それにXPは体系だった手法ではないから、効果に繋がるように取り入れるのは難しいよ」
「どういうことでしょうか？」
「あれは、いわば“ベスト・プラクティス”を集めたもので、上手く行く方法を、個別に徹底的にやろうというのが主旨のようだね。あそこで提案されているプラクティスを、ある程度使いこなせる人であれば、幾つかの条件さえ整えば、上手く行くだろう。ただし、あなた達に、状況に合わせてこれらの“プラクティス”を組み合わせて使う判断が出来るかな？」
「あそこへ上がっている方法を全部やる必要はないですよ」
「そうだね。状況によっては組み合わせることができないものもあるかもしれない。それより体系だった手法ではないということは、XPで提唱されているプラクティスを選んで実践したとき、XPとして上手くいったのかどうかをどうやって判断するかね」
「そうですね、必ず納期がミートするとは思えないですからね」

「私の編み出した『派生モデル開発プロセス』は、体系だった手順をもっているもので、規模などの条件が合えば、指示に添って実施していくと、必ず目指す“ゴール”に到達できるのだが、XPは、そうは行かないだろうね。提唱者に直接確認したわけではないので、想像だが、あの週40時間というのは、その際の判断に使うのではないのかな？」
「確かに、これだけは他のプラクティスと異質なことでは感じていたのですが、それ以上、考えたことはありません」
「週40時間で仕事を終える。XPはそのため提案されている。スケジュールもそれを前提にして立てている。だから週40時間を大きくオーバーするとすれば、何か忘れていくことになる。もっとも、『派生モデル開発プロセス』で私自身は週35時間で仕事をしていたがね」

疲弊した状態では先に進むことはできない。新しい方法に取り組むにも、疲弊しないための工夫なしには続けることはできない。

暁鐘の音

134

見えない老後の生活

駅前通りの角にあった葬儀屋さんの古い建物が壊された。新しい「セシモ二一ホール」に建て変わるようだ。私の住んでいる地域は確実に高齢化している。既存の小学校の生徒は減っているし、赤ちゃんそのものを見ることも少なくなつた。少し離れた丘陵地を切り開いたところに、新しい住宅団地ができたので、そこには若い世帯が多いし、子供も増えたため、近辺に新しい小学校が建っている。今まであった小学校では、生徒が減って維持できなくなっている。かといって、急激に若い子供が増えたのでは、既存の校舎では対応できない。やはり「急過ぎる」というのは無駄を生むだけだ。

そのような住宅政策に転じていけば、こうした社会投資の無駄は、相当部分を防げたはずである。



確かに、建築業者は仕事が入ってもうかるのだろつが、結局は、無駄であることには変わらないので、最終的には国力を消耗することになる。年金や国民皆保険などの社会制度は、今のままでは数十年後に確実に破綻する。そのときの資金として確保すべき資金を、コンクリートの瓦礫に変えているのである。

一方で、確実に地域の住民は高齢化している。企業がリストラを加速していることもあつて、退職した人が増えている。彼らは、昨日まで「企業戦士」として働いてきた人たちである。マスコミなどで、嘗ての技術を伝えるべく、退職後に中国やアジアに出て行く人のことが報じられているが、そのような人は、ほんの一部であつて、多くの人は、退職後に何かすることを持っていないわけではない。

これまで日本の「お父さん」は、仕事のために家庭をも犠牲にしてきた。だが、もう一つ犠牲にしたものがある。それは「社会人」としての役割である。日本の「お父さん」は、生活の

全てが「会社」にあつて、「社会」との接点を持っていない。精々、町内会の行事で借り出されるだけである。

ボランティアで参加できるような機会が少なすぎる。地域によっては、生協などが空気や川の水质の監視活動をやっているとがあつて、休日などに参加できるようになっている。あるいは、身体が不自由な人たちの世話をする機会があつたりするが、ほんの僅かである。街をきれいにする活動だつて、役所に任せるのではなく、自分たちが休日を利用してやればよい。

問題は、そのような活動をリードする組織が無いことである。これを役所

今月の一言

二〇世紀の終わりに、ソ連が解体し、冷戦構造の象徴であつたベルリンの壁が取り払われた。この時、「冷戦」の時代は終わったと多くの人たちは思った。もちろん、その後、

「人は戦争を掃することも、その魔の手から逃れることもない」(マキアヴェリ)

「何が一番「効果的」か(M・A・レディー著・渡部昇一訳より)」

アフリカなどで「戦争」が途切れたことはなかつたし、イスラエル周辺では、ずっとくすぶり続けていた。だが、それは、いすれも国内の闘争であつたり、隣接国とのあいだの局地的「紛争」と捉えられていた。さすがに湾岸戦争の時は、アメリカが本格的に参戦して、正規戦の様相を呈したこともあつて「戦争」という認識になつてはいる。ただし、一旦矛を収めたものの、当

が税金を使つてやつたのでは意味がない。あくまでも、ボランティアであることが大事で、そのためには、「NPO」のような組織がもっと生まれてこなければならぬ。「NPO」で一番のネックは、活動資金をどうやって集めるかである。日本の場合、寄付に關す税制の対応が遅れているため寄付を集められない。今のところ、財務省も税収が減るのを嫌がつて、ここには踏み込む気配は見えない。日本は、「少子高齢化」の社会が来ると言いながら、結局は何も備えていない。

私の妻が、考えを同じにする数人の主婦の人たちと一緒に、一年前にリサイクルの店を再開したが、今回は、今

時の中途半端さが、此処に来て再び火種になりかかっている。アフガニスタンも、まだアメリカの関与は終結していない。主たる闘いの相手が力を無くし、世界の指示を得た暫定政権が出来たことで落ち着くのかと思えば、今度

までの店とは違つて、将来、「NPO」の活動母体になれるように、地域に密着した活動をするように話している。店内は、お客さんたちとお茶を飲みながらいろいろ話しが出来るように、テーブルを置いてある。此処にいれば地域の様子が見え、そして此処から地域に向かつて何かを発信する場となることを考えている。

今まで日本の為に働いてきた人たちが、「高齢者」ということで、社会からお荷物の扱いを受けるのを、座視しているわけにはいかない。役割を見出せなくなつたとき、人は生きる力をも失つ。今度は、社会に向かつて存在を認めてくれる機会を作つて行かなければ、この社会は持たない。

によって、インド洋が「戦闘地域」となる可能性が高く、海上自衛隊の艦船を送り込んでいる日本政府は大きな決断を迫られる。現状に於いては、「参加」することは出来ないだろうから、「中立」を装つて引き上げるを得ないだろう。だがその際、やり方によって、日本の国威・国益を大きく損ねる危険がある。「中立」は、双方からコケにされる選択となり得る。

口利きで金を儲けることに右往左往し、地球上から戦争を終結できるという幻想の世界にどっぷり漬つた脳味噌からは、このような場面の対処の方法が出てくるのだろうか。